

ヒマラヤを描く えが

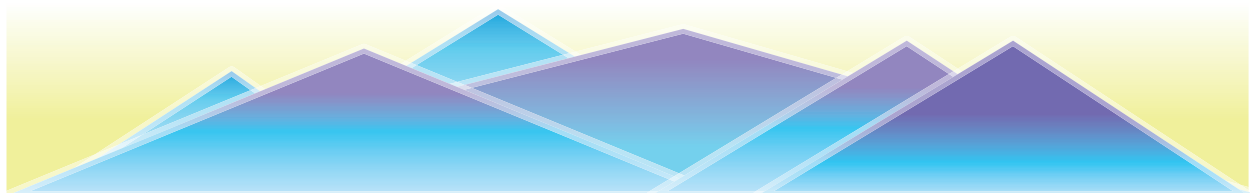
東京都道徳教育教材集「心 たくましく」の、百四十四ページを開いてく
ださい。

福王寺法林さんの「ヒマラヤの朝」の絵がのっています。世界の屋根とも
言われるヒマラヤ山脈の、雲をつきぬけて堂々とそびえ立つみねみねが、あ
らあらしいタッチで描かれています。朝日を浴びて金色にかがやくみねみね
は美しく、金粉をまぶしたような雲をまとい、力強さの中にも優しさをにじ
ませています。

この「ヒマラヤの朝」の絵は、ヒマラヤを見上げて描いた作品ではありま
せん。真正面から見すえて描いた絵です。まさに、福王寺法林さんの気はく
が伝わってくるこの絵は、いったいどのようなように描かれたのでしょうか。



福王寺法林さんは、幼いころに不りよの事故で左目の視力を失いました。
絵が得意だった法林さんは、このハンディにもかかわらず、持ち前の負けず
ぎらいの根性で人一倍努力し一流の画家になりました。



故郷こきやうの山々さんざんに囲まれて育った法林ほうりんさんは、幼いころから、いつか、世界一の山、ヒマラヤを描くぞと心に決めていたそうです。

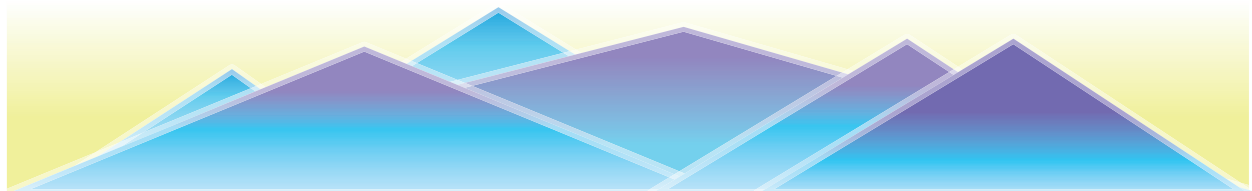
そして、その夢ゆめをかなえるために、五十三才の時にヒマラヤに行き、ついに連作を描き始めたのです。以降十八年間、法林ほうりんさんは、ヘリコプターや小型飛行機に乗り、ヒマラヤを間近に見て描き続けました。

八千メートル級の山を真正面からスケッチするのは、まさに命がけでした。考えられないほど寒くて空気もうすく、初めてヘリコプターで上空に上がった時は、酸素不足で気を失ったそうです。



ところで、福王寺法林ふくおうじほうりんさんが展覧会てんらんかいで初めて賞をとった作品は、「朝」という作品です。それは、自分の家の台所の様子をていねいに描いたもので、温かみのある家族の生活を物語っています。息子の一彦かずひこさんは、その絵について、

「『朝』は、ぼくが生まれた年の作品です。台所に手おしポンプがあって、父や母は物を大事にしますからぼくが中学生ぐらいまでありました。それをいつも父や母や兄がおしていたのをよく覚えています。当時の親子四人の生活がひとコマひとコマ思い出されます。」



と語っています。法林^{ほうりん}さんは、貧^{ます}しいながらも、家族とともに過^すごす生活とても愛していました。

一彦^{かずひこ}さんも有名な一流の画家です。一彦^{かずひこ}さんは幼^{おさな}いころから、父親が真^まけんな表情^{ひようじょう}で絵を描^かき、母親が岩絵の具をけん命にとく姿^{すがた}を見て育ちました。

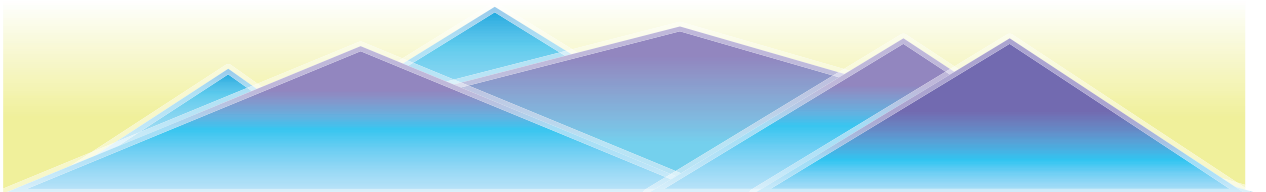
一彦^{かずひこ}さんが高校を卒業した直後、父の法林^{ほうりん}さんから、ヒマラヤにいっしょに行ってくれとたのまれました。役目は荷物運び、ヘリコプターや飛行機などの手配、絵を描^かいている時の助手などです。

一彦^{かずひこ}さんは、画家として生きていきたい自分自身の人生に向けて、いろいろな計画もありましたが、同行を決めました。

これが、ヒマラヤへの旅の始まりでした。結局、法林^{ほうりん}さんのヒマラヤスケッチ旅行は十数回におよびましたが、一彦^{かずひこ}さんはその全てに同行しました。



高度七、八千メートルでは水彩^{すいさい}絵の具はこおって使えないため、えん筆や色えん筆を使って描^かきます。しかし、しんはボキボキと折れてしまいます。一彦^{かずひこ}さんは父親が決して困^{こま}らないよう、無我^{むが}夢中^{むちゅう}でえん筆をけずりました。また、ある時は、法林^{ほうりん}さんのシートベルトを二本にした上で、さらにロープをかけ、一彦^{かずひこ}さんが力をふりしぼって父親の体を支^{ささ}えました。こうして、法^{ほう}



林^{りん}さんは、飛行機の開けたドアから身を乗り出して、眼下^{がんか}に広がる山脈をスケッチしたのです。

まさに親子でなしとげた命がけのスケッチが、「ヒマラヤの画家」ともよばれた福王寺法林^{ふくおうじ ほうりん}さんの大作を生み続けたのです。

法林^{ほうりん}さんはこのヒマラヤの旅を通して、息子の一彦^{かずひこ}さんに何かを伝えたかったのかも知れません。一彦^{かずひこ}さんにとっても、この経験^{けいけん}は、後の画家としての人生に大きなえいきょうをあたえたにちがいありません。

法林^{ほうりん}さんは、ある対談でこう語っています。

「前は子供^{こども}が心配でね。ここは危^{あぶ}ないとかいちいち子供^{こども}を心配していたけれども、今は、親父^{おやじ}ここは危^{あぶ}ないから気をつけなさいって、反対に心配かけています。」

福王寺法林^{ふくおうじ ほうりん}さんは、平成二十四年、九十二才で亡^なくなりました。それは、「心たくましく」が発行される、約一年前のことでした。

